

児童の様子

少しずつ暖かくなり、子どもたちもますます活動的になっています。あと1か月で進級する子どもたち。学年が上がることや新しい友達が入ってくることを楽しみにしている様子です。3月は新1年生を迎え入れるための準備も子どもたちと一緒にしていこうと考えています✧

最近「ドンジャラ」というボードゲームが流行っています♪子どもたちも初めて見た玩具であり、最初はルールを先生と一緒に確認しながら遊んでいました。みんながよくやるオセロよりも少し難しく、ルールを覚えるのに時間がかかりましたが、覚えてしまうと、「楽しい!」「もう1回しよう!」と何度も楽しむ姿が見られます(^▽^)/

今回はルールを覚えて初めてゲームをする子どもたちの様子をお届けします♪



最初はパイを並べていくんだって!



先に3つの絵が揃ったらドンジャラ!



ルール覚えた!ここを揃えてこのパイはこっちに置くんだよ~

よし、もう1回!



2年生が1年生に教えながらゲームを進めていました♪

◇ 3月の目標 ◇

「新1年生を迎える準備をする」

4月からはさんこう児童クラブに新1年生が入所し、人数が30名(定員)になります!子どもたちもとても楽しみにしているようです。

そこで、1年生を温かく迎え入れるためにみんなで室内の環境を整えたり、ロッカーの場所などを話し合ったりして、1年生が楽しく、気持ちよく過ごしてもらえるように考えて準備をしていきたいと思ひます♪



学校法人永原学園

さんこう 児童クラブ通信

令和6年3月発行
— 第12号 —

【三光幼稚園】

TEL: 0952-31-0753

【さんこう児童クラブ携帯】

TEL: 090-7430-1312

「目標に向かって」

1月に起きた能登半島地震から2カ月が経ちました。親しくしている石川県のこども園は園舎が無事だったことから、周囲の避難所として開放し地域の拠り所となりました。そこでは、子ども達がやりたいことを自由に決めて過ごし、大人は黙って見守っていたそうです。次第に笑い声が増え、小さな子どもから小学生までが助け合っ、物資を運んだり荷物を片付けたりして日中過ごしたと聞きました。

幼児期に育まれた主体的・対話的で深い学びが小学校の色々な授業の中でつながり、この様な避難所での生活の中でも活かされていくことを知り、改めて日々の生活の大切さを感じました。

小学校1年生も授業の中身がだんだん難しくなり、宿題に苦戦している姿も見られます。そんな時、「どうして?」を一緒に考える時間をつくって、解決していきたいと思ひます。

♡3月のおたのしみ♡

- 戸外活動
- 3月壁面製作
- 読書活動
- 室内ゲーム

(いす取りゲーム等)

3月の学童児童数

	在籍者数	休所者数	利用者数	そのうち 新規 入所者数	2月末 退所者数
1年生	12	0	12	0	1
2年生	11	0	11	0	0
3年生	1	0	1	0	0
計	24	0	24	0	1

「大谷家の子育て」

西九州大学子ども学部

子ども学科 准教授 宮崎耕一

老若男女問わず、今、話題の人と言えば、メジャーリーグ、ロサンジェルスドジャーズの大谷翔平選手でしょう。ベースボールプレイヤーとして超一流であることは言うまでもなく、その人間性についても尊敬に値する人物として、その一挙手一投足が母国日本はもとより全米で注目の的となっています。

そのような人物ですので、「我が子を大谷翔平のように…」と願う親は少なからず、いや、かなりの数存在しているものと思われ、大谷家の子育てへの関心も高まっています。

もちろん、大谷家の子育てをそのまま実践すれば必ず…、ということにならないことは誰もが理解していることと思いますが、その中には、子育てをする親として、また、教育者として心しておかなければならないヒントが見えてきます。

例えば、大谷選手は幼いころから「160kmを投げる」や「メジャーリーグに行く」などの大それたことを、臆することなくご両親の前で口にしてきたとのこと。その際、ご両親は「何をばかなことを…」や「できるはずがない」などと頭ごなしに否定せず、そのために何をどのようにすればよいか考えさせ、励まし見守ったそうです。また自分で決めることで、自己責任の考えや、自分で決めたことを頑張れる人になってほしいとの願いのもと、習い事や進路など親が口出しすることなく大谷選手自身に決めさせていたということです。

ご両親は本人が好きなこと、望むことを何よりも優先させ、自己決定を尊重し、その延長にある大きな決断もそっと見守りました。

実際、大谷選手は「母は、僕のやりたいことを僕のやりたいようにやらせてくれた。」、またご両親は「夫も私も子どもの人生の選択には口を挟みません。」「メジャー行きを宣言したのも、日本ハムを選択したのも息子の意志。自分が納得する方向に進むのがいちばんです。」と語っています。

心理学者でもある河合隼雄京都大学名誉教授は、著書『私が語り伝えなかったこと』の中で、「昔の親はお金がなく、子どもに最低限の衣食住ですら十分なことができなかつたため、何をしてやろうかと考えた。けれどもいまの親の愛情は『何をしないか』を考えなければならない」という言葉を残しています。

また、子どもの育ちについて「親は最短距離で成長してほしいとついつい願ってしまう…しかし、子どもは子どもなりのスタンス、ペースでその時々の貴重な成長のプロセスにある。」という言葉があります。

あわただしい日常生活の中、なかなか難しいことだとは思いますが、大谷家の子育てからヒントになりそうなものを探してみませんか。